

谷原つかさ『「ネット世論」の社会学
ーデータ分析が解き明かす「偏り」の正体』NHK出版新書（2024年）

先日、ある都立高校の文化祭にお邪魔した。そこで高校生たちが「自分達は何世代だと思うか」という命題に回答していた展示があったのだが、目を引いたのは「SNS世代」や「スマホ世代」といったもので、情報があふれる中で自らがそれを取捨選択することが求められる世代であるといった解説をつけている子もいた。もちろん高校生に限らず、街を見回せば多くの人がスマホを見ており、情報が多く得られる状況にあることはどの世代においても共通している。そして、このSNSを中心としたネット世論は、ここ最近、その力を増してきているようにも感じられる。実際テレビや新聞といったメディアにおいても、「ネットではどう言われているか?」といった内容のものも以前より多く目にするようになった気がする。このようなネット世論について、本書はその構造や実態、影響などについて、X（旧 Twitter）における投稿を題材として定量的なデータに基づいた分析をしているものである。

まず、第1章「「偏り」はなぜ生まれるのかーネット世論の構造ー」において、従来の世論とネット世論の違いが明らかにされ、そこで、これ以降の分析にもつながる2つの考えが提示されている。一つは、インターネットの特徴でもある各サイトにプログラムされたアルゴリズムが自分好みの情報を編集して出してしまう「フィルターバブル」、もう一つはSNSにおいて自分と似た興味関心を持つユーザをフォローすることで、同じような価値観や考え方の意見ばかりに触れるようになる結果、自分の考えは「正しい、多数派だ」と信じてしまう「エコーチェンバー」というものである。ネット世論に特有のクセは、これらが形成背景にあることが指摘される。

そして「第2章 データが示す実態ーネット世論の分布ー」では、2021年の衆議院議員選挙、2022年の参議院議員選挙時のXにおける自民党に関する投稿（ポスト）を収集し、それを反自民、ニュートラル、親自民の3区分に分類し、実際の投票結果や別に実施したアンケート調査の結果などとの関連が分析されている。「第3章 なぜ少数派の意見が大きく見えるのかーネット世論の正体ー」では、大阪府知事選を取り上げ、2章と同様に、Xの投稿と結果との関連をみているが、ここではさらにドイツの社会心理学者 ノイマンの提唱した「沈黙のらせん理論」（多数派の意見が強くなりやすく、少数派の意見が弱くなりやすくなること）を取り上げながら、少数派であるはずのネット世論が強くなっていく過程についても言及している。そして、いずれの選挙における分析もネット世論は自民党や吉村候補（当時）に批判的なものが多く、実際の選挙結果とは逆になっていることが明らかにされる。さらに、投稿の多くが限られたアカウントからの投稿で形成されていることも指摘されており、Xのネット世論はごくわずかなユーザによって作られているということを実証している。以降、「第4章 ソーシャルメディアは社会を変え得るかーネット世論の希望ー」では旧ジャニーズの性加害問題のXにおける投稿の分析から、少数派が力をつけていく過程をさらに検討し、最後の「第5章 フェイクニュース時代の歩き方ーネット世論と向き合うー」では、ネット世論のクセを理解しながら、それを適切に捉える必要のあ

ることが示されている。

データ分析もわかりやすく説明されており、全体的に読み進めることにそれほど苦労はなかったが、最低限の統計学の知識はあったほうが読みやすい。興味深かったのは、Xの投稿を分類する方法で、膨大な数の投稿の一部をまず研究者が分類し、それを教師として残りをAIに分類をさせるというものであった。この内容について本書内にそれほど詳しい記述がなかったのは残念だが、ビッグデータ時代の質的データの分析として、非常に大きな可能性を感じた。

（加藤 健志）